

「外国語」指導を担う小学校教員養成カリキュラムの開発 —実践的英語指導における学年間の差異と傾向—

A Study on Development of Elementary School Teacher Training Curriculum for “Foreign Language” Teaching —Grade Differences and Tendencies of Practical English Teaching—

佐藤大介^{*}
Daisuke SATOH

Abstract

The Japanese government decided that “foreign language (mainly English)” classes would become a mandatory for 5th and 6th graders and “foreign language activity” classes were given to 3rd and 4th graders. Because elementary school teachers now require English communication and teaching skills, universities with elementary school teacher training courses or programs must change their curriculum. The purpose of this study is to develop and tentatively plan an English curriculum for elementary school teachers at the university. To gauge their ability to teach practical English in elementary school, 141 university students were surveyed with questionnaires. Data was analyzed using a χ^2 -square test and an explorative factor analysis. In the χ^2 -square test, nine items were statistically significant between grades. The factor analysis results were classified into three skills or abilities: 1) teaching or class management skills, 2) English proficiency, and 3) English sounds or pronunciation. In particular, teaching or class management skills are statistically significant between freshmen and seniors. A tentative plan was created based on these results. In this plan, university students would acquire knowledge about English language education through general education English classes. The plan also includes additional English learning programs such as extensive reading or e-learning to enhance their English proficiency.

1. はじめに

小学校において5・6年生を対象に必修化となっている外国語活動であるが、外国語教育の早期化・教科化が2020年度より開始される。小学校教員はこれまで以上に、英語力や英語指導力等の英語教育に関する専門性を向上させていく必要があり、特に、大学での教員養成段階において、それらの能力を身に付けておくことは大変重要である。現在の外国語活動に関する指導法については、「小学校教諭の教職課程等における外国語活動の取扱いについて（通知）」（2009）において、「教職に関する科目」に準ずる科目として、「教科又は教職に関する科目」の中に位置づけた上で、開設することが望まれるとあるが、対応は各大学によって様々である。しかし、文部科学省中央教育審議会の答申で

* くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

は、小学校教員養成課程における教科に関する専門的事項や各教科の指導法において、外国語の科目構成について改善（追加）を行うよう求めており、養成段階で外国語教育に関してより高度な専門的内容を扱うことが求められることになる。

本論では、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の平成27年度報告に基づき、小学校教員養成課程を設置している大学における「外国語」指導を担う教員養成カリキュラムについて、一般教養として開講されている英語の授業を含めた4年間の学年開講順序に焦点を当て、カリキュラムの開発を試みる。

2. 研究の背景

2.1 小学校における英語教育に関する教員養成について

2011年度より、小学校5・6年生に対して年間35時間の外国語活動が必修化された。それ以降、「これからの中等教育等の在り方について」（教育再生実行会議第三次提言）（2013年5月28日）では、「グローバル化に対応した教育の充実」を目的として、「第2期教育振興基本計画」（2013年6月14日）では、「未来への飛躍を実現する人材の養成」を目的として、また、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」（2013年6月14日）においては、「世界と戦える人材を育てる」ことを目的として、初等中等教育における英語教育の抜本的な拡充・強化が掲げられ、小学校における実施年数の早期化、指導時間増、教科化、指導体制（専任教員配置等）の在り方等に関する検討が盛り込まれた。これを受けて、2013年12月13日、文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表し、次期学習指導要領での実施（2018年度段階的先行実施、2020年度全面実施）に向け、小学校中学年で活動型、高学年で教科型としての導入を進めていく方針を固め、2014年2月4日「英語教育に関する有識者会議」を設置した。その後9回の議論を経て、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」（2014年9月26日）を発表した。その中で、小学校高学年での教科化については、「より専門性の高い教科指導を行う指導者の養成・採用」の必要性について言及しており、特に、「小学校段階で系統的な指導を行うため、児童の発達段階に応じた、英語を『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』及び『書くこと』の4つの技能にわたる総合的なコミュニケーション能力を身に付けるための英語の指導力を高める内容が求められる」と記述されている。こうした経緯を踏まえ、文部科学省は「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」を2015年度・2016年度実施（委託）し、その中で、小学校教員の教職課程におけるコア・カリキュラムを含めたモデル・プログラムの開発に向けた調査研究を行っている。

2.2 本学の小学校教員養成課程における英語教育について

本学子ども教育学部子ども教育学科小学校・特別支援学校コースにおける2016年度の英語教育関連科目（表1）については、英語I・II・III・IV・V・VIおよび英会話I・IIの8科目を「教養に関する科目」として、外国語活動の1科目を「専門に関する科目」として開講している。英語I～VIは日本人教師が、英会話I・IIは外国人教師がそれぞれ授業を担当している。また、小学校教諭一種免許状取得に必要な「専門に関する科目」は、選択科目としてピアノ演習VII・VIIIおよび声楽III・IV、必修科目として外国語活動を除き、3年終了時までに開講・履修できるカリキュラムとなっている。

表1 小学校・特別支援学校コースにおける2016年度英語教育関連科目

授業科目	1年		2年		3年		4年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
	英語I	英語II	英語III	英語IV	英語V 英会話I	英語VI 英会話II	外国語活動	

※下線は必修科目

る。吉岡（2014）は、本学のカリキュラムの特色として、豊富な実習経験を通して、外国語活動のための確かな英語力を養成することにあるとしており、1年次から「外国語活動」を視野に入れた英語学習と実習に取り組む目標を掲げている。しかしながら、各科目間に系統性はなく、授業内容については担当教員の裁量に任されている状態であり、系統的な英語教育ができているとは言い難い。各学年での現在の学習状況を把握し、それぞれの学年の特徴を理解し、現状を見直すことは意義がある。

3. 研究目的および方法

3.1 研究目的

前述の小学校英語教育改革の動向をふまえ本学の英語教育の現状について改善させていくことが求められており、本研究では、次期学習指導要領に対応した小学校における英語教育を担う教員養成カリキュラム開発を目指す。特に、小学校英語指導に求められる能力に焦点を当てて四年制大学の学年別の傾向を調査し、得られた結果に基づきながら「外国語」指導を担う小学校教員養成カリキュラムについて試案する。

3.2 分析方法

本論では、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成27年度報告書における小学校教員養成コア・カリキュラム（試案）および小学校外国語活動研修ガイドブック（2008）における学習項目を比較・検討し、知識・理論に関連する項目を除く実践的英語指導に関連する31項目を独自に作成し調査を行った。

これらの各項目について、現行の本学の教員養成カリキュラムを履修している小学校教員を志す大学生（1年生26名、2年生35名、3年生28名、4年生52名、合計141名）を対象に、どの程度習得・獲得しているかについて5件法（「全く身に付いていない」、「あまり身に付いていない」、「どちらとも言えない」、「少し身に付いている」、「十分身に付いている」）による質問紙法を用いて実施した。実施に際しては、英語教育について学習していない大学生も含まれているため、「チャンツ」や「インプット」、「モジュール学習」等の一部の用語については口頭での補足説明を行った。得られた回答141名すべてを有効回答とし、IBM SPSS Statistics バージョン23を用いて、各調査項目における学年間の差を調査するため χ^2 二乗分析および残差分析を、また、大学生の傾向を調査するため因子分析および因子別の一元配置分散分析・多重比較（Tukey法）を行った。なお、本研究で用いた調査項目はクロンバッック $\alpha = .958$ となっており、高い信頼性が得られた。

4. 結果

4.1 χ^2 二乗分析の結果

まず、31項目すべての調査項目について分析を行った。「全く身に付いていない」を1、「あまり身に付いていない」を2、「どちらとも言えない」を3、「少し身に付いている」を4、「十分身に付いている」を5として得点化し、 χ^2 二乗分析を行った。項目ごとの平均値と標準偏差および χ^2 二乗値は表2の通りとなった。 χ^2 二乗分析の結果、9項目において学年間に有意差があり、それぞれの項目について各学年における得点頻度を確かめるため、残差分析を実施したところ、表3の結果が得られた。残差分析の結果から、1年生では23、24、26、27、29の各調査項目において、「全く身に付いていない」と回答する傾向がある一方で、4年生では、3、6、14、23、24、27、29の各項目において、「少し身に付いている」と回答する傾向があった。また、2年生では3、6の項目において「あまり身に付いていない」、3年生では4、23の項目において「あまり身に付いていない」と回答する傾向にあった。

4.2 因子分析の結果

データの分布に著しい偏りがないことを確認し、本調査に協力した大学生の傾向を調査するため探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。分析の結果、固有値1を超える因子が5つ確

認でき、スクリー基準を基に3因子であると考えられるため、因子数を3として再度分析を行った。その結果、内的整合性も各因子で確認でき、さらに解釈しやすい単純構造となつたため、3因子解を採用した（表4）。

第1因子は、「単元の目標を適切に設定し単元を構成すること。」や「指導場面における4技能（聞く・話す・読む・書くこと）統合型の授業イメージを持つこと。」といった項目が高い因子負荷を示しており、授業での実際の指導技術に関連した項目が多いことが分かる。また、児童との関わりや教材の活用について含まれている項目も因子負荷量が高いことから、第1因子は「指導技術・授業力」因子とした。

表2 実践的英語指導に関する調査項目の記述統計量と χ^2 二乗検定の結果

調査項目	n	M	SD	χ^2
1. ALT等に対して授業の流れやALT等がすべきことを英語で説明すること。	141	2.14	.899	5.97
2. 相手意識を持って英語で話したり書いたりすること。	141	2.57	.980	15.33
3. 英語の発音や強勢、リズム、イントネーションを意識した会話をすること。	141	2.79	.945	22.64*
4. 平易な英語表現を十分正確に運用すること。	141	2.92	.911	22.07*
5. 英語を用いて分かりやすいイントネーションで会話をすること。	141	2.49	.907	12.13
6. 英語のチャンツに合わせて、英語のリズムを取ること。	141	2.72	1.044	22.35*
7. 英語らしいリズムを意識してマザーゲース等を朗誦すること。	141	2.50	.983	12.16
8. 聞き手である児童を意識しながら絵本の物語を読み聞かせること。	141	2.79	1.006	13.97
9. 児童向けの英語の歌を歌うこと。	141	3.01	1.014	12.74
10. (視聴覚)教材・ICT等の特徴を理解し、適切に活用すること。	140	2.68	.892	11.88
11. 英語のインプットを与えながら、児童がどの程度言えるようになったか確認すること。	141	2.59	.934	3.78
12. 音声で慣れ親しんだ表現を、なぞったり、書き写したりできるよう適切に導くこと。	141	3.02	.952	3.41
13. 音声を含む教材を選定する際にその質を吟味すること。	141	2.54	.953	6.38
14. 様々な活動を適切に組み合わせて1時間の授業を構成し、学習指導案を作成すること。	140	2.53	.985	26.43**
15. 児童が理解できないことが何かを見極め、適切に分かるように言い換えること。	139	2.45	.911	19.15
16. 児童の一人称での発話に対して、二人称で復唱すること。	141	2.99	.967	17.63
17. 児童の発話に誤りがあった際に正しく言い直して聞かせたりすること。	141	2.62	1.019	14.34
18. 児童の発話を受け止め、適切に英語で反応すること。	141	2.55	1.003	14.08
19. 児童の理解を助ける教材を適切に選択・作成すること。	141	2.59	1.015	19.34
20. 児童の自然な発話を引き出すこと。	141	2.40	.993	19.62
21. 指導場面における4技能(聞く・話す・読む・書くこと)統合型の授業イメージを持つこと。	141	2.59	.903	11.90
22. 児童を中心に据え、英語を使って何ができるかを念頭において適切に評価すること。	140	2.64	.953	18.24
23. 授業で目標とする英語表現が児童の興味・関心とつながりを持つよう適切に題材を選定すること。	141	2.69	.972	23.11*
24. 授業で目標とする英語表現を、児童の興味・関心に合う内容と結び付けること。	141	2.62	.883	34.60**
25. 授業目標とする英語表現を、ていねいに何回も、フルセンテンスで語りかけること。	140	2.51	.956	20.91
26. 正書法(スペル、句読点、大文字・小文字の区別等)について説明すること。	140	2.82	1.020	22.28*
27. 単元の目標を適切に設定し単元を構成すること。	140	2.63	.984	27.05**
28. 短時間学習(モジュール学習)において単元との関連を常に意識し、適切にその内容を設定すること。	141	2.43	.935	14.75
29. ティーム・ティーチングにおいて適切に役割を果たすこと。	141	2.73	1.020	31.57**
30. 文字遊びなどを通じて児童に文字を親しませること。	141	3.06	1.013	18.76
31. 発音と綴りの関係について説明すること。	141	2.31	.965	8.86

* $p < .05$ ** $p < .001$

表3 χ^2 二乗検定の結果に基づく残差分析結果

調査項目	学年	全く身に付いていない	あまり身に付いていない	どちらとも言えない	少し身に付いている	十分身に付いている
3. 英語の発音や強勢、リズム、イントネーションを意識した会話をすること。	1年生	0	7	14△	4	1
	2年生	3	17△	10	4▼	1
	3年生	1	12	7	8	0
	4年生	6	12▼	15	19△	0
4. 平易な英語表現を十分正確に運用すること。	1年生	0	9	11	6	0
	2年生	1	9	14	10	1
	3年生	0	14△	2▼	11	1
	4年生	5△	12▼	21	14	0
6. 英語のチャンツに合わせて、英語のリズムを取ること。	1年生	2	12	10	1▼	1
	2年生	3	18△	9	5	0
	3年生	3	6	11	7	1
	4年生	8	13	10	18△	3
14. 様々な活動を適切に組み合わせて1時間の授業を構成し、学習指導案を作成すること。	1年生	10▼	8	7	1	0
	2年生	6	14	14	1▼	0
	3年生	4	8	11	5	0
	4年生	3▼	14	20	11△	3△
23. 授業で目標とする英語表現が児童の興味・関心とつながりを持つよう適切に題材を選定すること。	1年生	7△	6	13	0▼	0
	2年生	5	10	15	4	1
	3年生	3	12△	8	5	0
	4年生	3	10	22	15△	2
24. 授業で目標とする英語表現を、児童の興味・関心に合う内容と結び付けること。	1年生	9△	10	7	0▼	0
	2年生	3	13	15	4	0
	3年生	1	9	16	2	0
	4年生	2▼	13	22	14△	1
26. 正書法(スペル、句読点、大文字・小文字の区別等)について説明すること。	1年生	7△	7	8	3	0
	2年生	3	4	17	11	0
	3年生	1	3	12	11	1
	4年生	7	17△	14	13	1
27. 単元の目標を適切に設定し単元を構成すること。	1年生	8△	7	10	0▼	0
	2年生	6	9	17	2▼	1
	3年生	3	8	11	6	0
	4年生	3▼	17	14	17△	1
29. ティーム・ティーチングにおいて適切に役割を果たすこと。	1年生	9△	7	8	2▼	0
	2年生	8	10	12	4▼	1
	3年生	3	7	9	9	0
	4年生	0▼	12	19	21△	0

$p < .05$ 、△は有意に多い、▼は有意に少ない

表4 実践的英語指導に関する調査項目の因子分析結果

	<i>f1</i>	<i>f2</i>	<i>f3</i>
27. 単元の目標を適切に設定し単元を構成すること。	.937	-.017	-.225
21. 指導場面における4技能(聞く・話す・読む・書くこと)統合型の授業イメージを持つこと。	.845	.006	-.064
28. 短時間学習(モジュール学習)において単元との関連を常に意識し、適切にその内容を設定すること。	.835	.051	-.103
22. 児童を中心に据え、英語を使って何ができるかを念頭において適切に評価すること。	.828	-.060	.025
19. 児童の理解を助ける教材を適切に選択・作成すること。	.815	-.033	.041
14. 様々な活動を適切に組み合わせて1時間の授業を構成し、学習指導案を作成すること。	.787	-.144	-.029
23. 授業で目標とする英語表現が児童の興味・関心とつながりを持つよう適切に題材を選定すること。	.778	.022	-.038
29. ティーム・ティーチングにおいて適切に役割を果たすこと。	.762	.059	-.034
30. 文字遊びなどを通じて児童に文字を親しませること。	.739	-.133	.061
24. 授業で目標とする英語表現を、児童の興味・関心に合う内容と結び付けること。	.696	.037	.097
20. 児童の自然な発話を引き出すこと。	.649	-.021	.167
15. 児童が理解できないことが何かを見極め、適切に分かるように言い換えること。	.620	.054	.157
10. (視聴覚)教材・ICT等の特徴を理解し、適切に活用すること。	.610	-.194	.272
26. 正書法(スペル、句読点、大文字・小文字の区別等)について説明すること。	.595	.048	-.005
25. 授業目標とする英語表現を、ていねいに何回も、フルセントンスで語りかけること。	.571	.088	.175
11. 英語のインプットを与えるながら、児童がどの程度言えるようになったか確認すること。	.542	-.046	.261
18. 児童の発話を受け止め、適切に英語で反応すること。	.530	.294	.072
17. 児童の発話に誤りがあった際に正しく言い直して聞かせたりすること。	.526	.097	.161
13. 音声を含む教材を選定する際にその質を吟味すること。	.469	.070	.153
31. 発音と綴りの関係について説明すること。	.455	.208	.051
16. 児童の一人称での発話に対して、二人称で復唱すること。	.450	.116	.141
12. 音声で慣れ親しんだ表現を、なぞり、書き写したりできるよう適切に導くこと。	.438	-.029	.154
2. 相手意識を持って英語で話したり書いたりすること。	.194	.895	-.199
1. ALT等に対して授業の流れやALT等がすべきことを英語で説明すること。	.166	.691	-.123
3. 英語の発音や強勢、リズム、イントネーションを意識した会話をすること。	-.305	.690	.267
4. 平易な英語表現を十分正確に運用すること。	-.088	.535	.204
5. 英語を用いて分かりやすいイントネーションで会話をすること。	-.171	.486	.476
7. 英語らしいリズムを意識してマザーグース等を朗誦すること。	-.014	.108	.752
6. 英語のチャンツに合わせて、英語のリズムを取ること。	.119	.104	.559
8. 聞き手である児童を意識しながら絵本の物語を読み聞かせること。	.325	-.062	.535
9. 児童向けの英語の歌を歌うこと。	.198	.024	.497
信頼性 α 係数	.957	.844	.799
因子間相関	<i>f1</i>	1.000	.481
	<i>f2</i>		.581
	<i>f3</i>		.563
			1.000

第2因子は、「相手意識を持って英語で話したり書いたりすること。」や「ALT等に対して授業の流れやALT等がすべきことを英語で説明すること。」といった項目の因子負荷量が高くなっている。そこで第2因子を「英語運用能力」因子とした。

第3因子は、「英語らしいリズムを意識してマザーグース等を朗誦すること。」が高い因子負荷を示している。また、「英語のチャンツに合わせて、英語のリズムを取ること。」、「聞き手である児童を意

表5 3因子の分散分析結果

	n	1年生		2年生		3年生		4年生		df	F	p
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
指導技術・授業力	141	2.27	.76	2.63	.68	2.63	.59	2.83	.68	3	4.05	.009**
英語運用能力	141	2.61	.49	2.53	.65	2.58	.80	2.62	.85	3	.11	.952
英語音声・発音能力	141	2.58	.72	2.65	.71	2.87	.82	2.85	.88	3	1.06	.367

* p < .05 ** p < .001

識しながら絵本の物語を読み聞かせること。」「児童向けの英語の歌を歌うこと。」の3項目については、中程度の負荷ではあるが本因子と関連があり、これらは英語の音声・発音に関連する項目であると考えられる。また、第2因子に含まれている「英語を用いて分かりやすいイントネーションで会話すること。」の項目についても、中程度の因子負荷を示していることから、第3因子は「英語音声・発音能力」因子とした。

次に、因子分析結果をふまえ、各因子の学年間の差について一元配置分散分析を行い、さらに学年間の比較を行うため多重比較(Tukey法)を用いて分析した(表5)。その結果、「指導技術・授業力」において、学年間に有意な差があり、学年ごとの差を比較(p < .05)したところ、1年生と4年生に有意な差(p = .004)があった。「英語運用能力」「英語音声・発音能力」に関しては、いずれの学年間にも有意な差は確認できなかった。

5. 考察

5.1 本学における学生の現状

分析結果から、本学の学生の傾向として、「指導技術・授業力」、「英語運用能力」、「英語音声・発音能力」の3つの能力に分類することができた。ただし、因子間相関は低い値を示したため、この3つの能力がそれぞれ相互に影響を与えるかについては検討できなかった。

「指導技術・授業力」については、高年次になるほど、身に付いていると感じている学生が多い。統計的に有意な差はないものの、1年生から2年生、3年生から4年生への平均値の伸びが顕著であることは、「教養に関する科目」から「専門に関する科目」の受講が増加すること、小学校教育実習の経験や「外国語活動」を履修していることなどの理由が考えられる。 χ^2 二乗分析の結果において学年間に有意差があった6つの調査項目は授業や指導実践に関連する内容であり、そのうち26を除く5項目については4年次であるほど「少し身に付いている」と回答する傾向にあったことから、この「指導技術・授業力」についての具体的な学年の差は、学習指導案の作成(授業構成)、児童の発達段階に応じた単元構成、チーム・ティーチングに関連する内容であることが推測できる。

「英語音声・発音能力」についても同様に、高年次になるほど、身に付いていると感じている学生が多い。2年生から3年生にかけて平均値の伸びが見られ、4年生は3年生と大きな差が見られないことから、「英会話I」や「英会話II」を受講したことにより、学生は英語の音声的特長に対する理解や発音に対する自信を持つことができたのではないかと考えられる。 χ^2 二乗分析の結果では、「英語のチャンツに合わせて、英語のリズムを取ること。」について2年生は「あまり身に付いていない」と回答する傾向があり、また「英語音声・発音能力」因子ではないが、同様に「英語の発音や強勢、リズム、イントネーションを意識した会話をすること。」についても、「あまり身に付いていない」と回答する傾向があることから、英語らしいリズムやイントネーションについても学年の差があることが推測できる。

しかしながら、「英語運用能力」については、本学のカリキュラムにおいて1年次から3年次まで継続して英語関連科目を開講しているにも関わらず、学年間に差は見られなかった。1年生の平均値

が他の学年よりも高い点については、昨年度までの大学受験や高校での学習が影響しているものと考えられるが、それでも英語運用能力として十分とは言いがたい。これは、英語教育改革において英語力と指導力の両方を身に付けた教員養成が必要であるにもかかわらず、十分に英語運用能力を向上させることができていないと言わざるを得ない。さらに、調査項目「平易な英語表現を十分正確に運用すること。」においては、3年生は「あまり身に付いていない」、4年生は「全く身に付いていない」と回答する傾向があることから、高年次になるほど、英語運用能力について自信がなくなっていることが分かる。

また、本考察では各学年の差や傾向を論じているが、いずれの能力の平均値も本調査項目の中央値3を満たしていないことから、多くの学生がこれらの能力について少しでも身に付いているとは考えていない。このことは、正規のカリキュラムだけではこれらの力を身に付けることが十分にできないということを示唆しており、4年間のカリキュラムにおける英語関連授業科目において相互補完的に関連させていくことや、学生に対しては授業時間外にも英語力や指導力向上のための自主的学習、つまりカリキュラム外での学習も導入していくことが重要であると考えられる。

5.2 「外国語」指導を担う小学校教員養成カリキュラムの試案

以上のことから、本学における学年ごとの学生の状況に基づき、次期学習指導要領での小学校における「外国語活動」や「外国語」指導を担う教員養成カリキュラムについて試案を検討する。なお、本論では知識・理論に関しては調査対象としていないが、各学年の特徴を整理し、カリキュラム試案において取り扱うことが可能と考えられる学習項目についても考察する。

1年次であるが、高校卒業時までの英語力が維持されている時期であることから、英語運用能力および英語音声・発音能力を中心とした学習内容が必要である。特に、英語運用能力においては、4年次まで自信を持つことができていないことからも、英語多読学習やe-learning教材などを活用して、学生が授業時間外でも英語学習に取り組むことができる環境を提供し、学生自身が卒業時まで継続して英語運用能力を向上させることができるよう配慮しなければならない。また、授業中に実際の英語学習と関連付けながら効果的な英語学習法や発音記号について指導することにより、第二言語習得理論や第二言語教授法、英語音声学、フォニックス等に関する知識についても学生が学習することができるよう授業内容を工夫することができる。

2年次については、教職に関する科目の履修を開始することから、小学校外国語の指導実践において必要となるマザーグース等の児童文学や英語歌などを教養英語での授業教材として扱い、英語音声・発音能力の向上を目指す。授業では英語のリズムやイントネーション等の音声的特長やアクセント等の発音について具体的に指導する。また、授業で扱う題材に関連した国際理解教育・異文化理解教育も合わせて行い、様々な国や地域の生活や習慣についても学生が理解できるように工夫する。さらに、英語運用能力の向上についても、1年次での授業時間外英語学習を継続的に取り組むよう配慮する必要がある。

3年次については、後期（10月）に小学校教育実習があることから、実習現場で求められる指導技術・授業力の向上を中心とした授業、つまり「外国語の指導法」を前期に開講する必要がある。内容については、教科教育に関する内容を網羅的に扱う必要があるが、小学校外国語教育に関する知識・理解を図るとともに、アクティブ・ラーニングやCLIL (Content and Language Integrated Learning)、ICT活用による指導等、これから的小学校教育に求められる指導技術についても合わせて扱う。なお、デジタル教材やICT機器については4年間継続して大学教員が積極的に活用し、学生に小学校外国語での活用イメージをつかませることも重要である。さらに、模擬授業や外国語教育ボランティア活動を通しての省察を含めた実践的な指導技術・授業力の向上を目指す必要がある。英語運用能力や英語音声・発音能力については、学生が自発的な学習を継続できるよう考慮する。

4年次、前期は小学校教員採用試験に向けて意識が高まっている時期であり、採用試験においても今後はさらに英語力を問う出題が増加することが予想されるため、指導力の前提となる英語力の維持・

向上を促していく必要がある。また、試験後は授業や卒業研究以外ではプライベートな時間も多くなる。前期は試験のための英語学習となりがちであり、後期は英語学習が一旦中止されがちになる時期である。こうしたことから、1年次から継続して取り組んでいる英語学習について空白期間を作らないよう配慮することも必要であると考えている。

また、文部科学省中央教育審議会「これからの中学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（2015年12月21日）において、教育実習の実施時期の改善や学校インターンシップの導入、教科及び教科の指導法に関する科目に「外国語」および「外国語の指導法」の追加について言及がある。教育実習の実施時期によって、教員養成カリキュラムにおける英語関連科目の学年開講時期に大きな影響があるのは確かである。本学の2013年度入学生（現4年生）のカリキュラムでは4年次前期が「外国語活動」の開講期とされており、また、2014年度入学生以降でも外国語活動は3年次後期の開講となっているため、外国語教育に関する学習をしていない状態で教育実習に臨むことになり、教育実習前に履修できるカリキュラムが必要である。学校インターンシップについては、3年次・4年次の実践的指導力を高め、総合的に英語力・指導力を高めるためにも重要なプログラムである。本調査結果では、3つの能力について身に付いていると感じている4年生が少ないとから、卒業後、小学校教諭として学校現場の即戦力となるためにも、学校ボランティア等実践的指導の経験は重要である。教科及び教科の指導法に関する科目に「外国語」が追加される点については、従来の一般教養としての英語教育とは別に、「外国語」の専門的な内容を扱う授業を開講できることになり、本科目については低年次での開講が望ましいと考えている。

以上の考察をふまえ、本学における「外国語」指導を担う小学校教員養成カリキュラムは以下の試案を作成した（【】内の下線は必修科目と考えられる授業科目）。

1年次 前期	<u>【英語 I】</u>	・英語学習法の指導 ・音読活動による発音指導	英語多読 e-learning
	後期 <u>【英語 II】</u>	・様々な英語教授法に基づく授業展開	↓
2年次 前期	<u>【外国語】</u>	・英語の基本的な音声の仕組み ・語彙・文法に関する基礎知識	↓
	※新設	・発音と綴りの関係	↓
	<u>【英語 III】</u>	・児童文学 ・英語の歌	↓
	後期 <u>【英語 IV】</u>	・外国の生活や習慣、文化	↓
	<u>【英会話 I】</u>	・日常会話や教室英語を用いた発音指導	↓
3年次 前期	<u>【外国語の指導法】</u>	・小学校外国語に関する知識・理解 ・子どもの第二言語習得に関する知識・理解	↓
	※新設	・模擬授業、授業実践・省察 ・異文化交流	↓
	<u>【英会話 II】</u>		↓
後期	※教育実習		↓
	<u>【英語 V】</u>	・英語に関する外部試験対策指導	↓
4年次 前期	<u>【英語 VI】</u>	・小学校外国語での題材に基づく授業展開	↓
	※学校インターンシップ		↓
後期	<u>【英語 VII】</u>	・4技能統合型の授業展開	↓

このカリキュラムでは、学生は英語多読やe-learning（英語コミュニケーション能力を高められるコンテンツ：文法、語彙、英会話等）を継続して授業時間外に学習できる環境があり、各学期の英語関連科目において進捗状況を確認しながら取り入れる。また、3年次後期を教育実習、4年次前期に学校インターンシップ実施を前提に、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の小

学校教員養成コア・カリキュラム（試案）に掲げられている学習項目を網羅的にかつ段階的に教育実習までに学習できるよう配慮した。さらに、教育実習後も、英語運用能力や教育現場をイメージしながら、学生が主体的に英語学習に取り組めるような題材や授業展開とした。また、教員採用試験において TOEIC や英語検定等の外部試験の結果が求められるようになっていることからも、教員採用試験までに必要な指導を行うことも重要であると考えている。

6. まとめ

本研究は、新たに設置される「外国語」（教科に関する専門的事項）や「外国語の指導法」（各教科の指導法）において取り扱うべき具体的な内容については触れておらず、「外国語」指導を担う小学校教員養成カリキュラムについて、教養英語を含めた 4 年間の各学年における授業内容および順序について検討した。しかしながら、本研究の意義は、各学年の傾向などを把握することによって、教養英語も含めた小学校外国語担当教員養成カリキュラムの必要性を示唆しており、さらには、教養英語を取り扱う内容を検討することで、今後設置予定の「外国語」に関する 2 科目の内容について、より一層精査することができるのではないかと考えている。

本論で示したカリキュラムの試案については、実際にどの程度有益であるか今後検証していく必要がある。特に、本学の学生を対象とした調査結果に基づいた内容であるため、この試案は汎用的なものであるとは考えていない。ただし、学年間の差異と傾向をつかむことで、各授業においてどのような教育を展開していくべきかが明確となった。今後こうした研究成果を活かしながら、小学校教員養成課程の改革にも取り組んでいきたい。

参考・引用資料・文献

- 岡秀夫・金森強（編著）。（2012）。小学校外国語活動の進め方—「ことばの教育」として—。（pp. 146-153）東京：成美堂。
- 教育再生実行会議。（2013）。これからの中等教育等の在り方について（第三次提言）．p. 4.
- 首相官邸。（2013）。日本再興戦略-JAPAN is BACK-（閣議決定）．p. 18.
- 東京学芸大学。（2016）。文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 27 年度報告書。
- 文部科学省。（2008）。小学校外国語活動研修ガイドブック。
- 文部科学省。（2009）。小学校教諭の教職課程等における外国語活動の取扱いについて（通知）：文部科学省。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/101/shiryo/attach/1340229.htm.
2016 年 9 月 5 日アクセス。
- 文部科学省。（2013）。第 2 期教育振興基本計画. p. 58.
- 文部科学省。（2013）。グローバル化に対応した英語教育改革実施計画。
- 文部科学省。（2014）。今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～：文部科学省。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm.
2016 年 9 月 5 日アクセス。
- 文部科学省中央教育審議会。（2015）。これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）。
- 文部科学省。英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業：文部科学省。
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362173.htm. 2016 年 9 月 5 日アクセス。
- 吉岡由佳。（2014）。小学校教員養成課程における「外国語活動」指導力育成カリキュラムの開発—英語実習導入と評価方法の明確化—. くらしき作陽大学作陽音楽短期大学研究紀要, 47(2), 23-36.